



その他

マックギル大学との出会い

高木 タカ子¹⁾

An encounter with McGill University

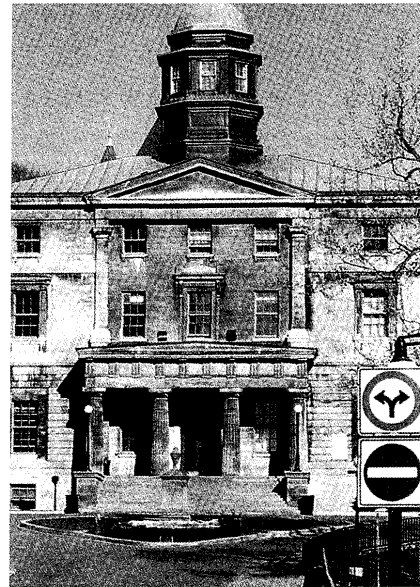
Takako TAKAGI¹⁾

はじめに

平成17年4月本学に、群馬パース大学保健科学部看護学科・理学療法学科の1回生が入学した。学生の定員が2学科で120名、4年そろっても480名。小さな小さな大学である。小さい大学でも夢は大きく、学ぶ学生も教員にも大きな希望と将来に夢を持ちながら、学習や教育・研究を、楽しんでしてほしいと願っている。私は大学が完成年次を迎える際に、やる気と可能性のある学生の中で、国内国外を問わず、留学をしたいと考えている者は、此処から外の世界に羽ばたいて欲しいと思う。留学は外国に行くだけではなく国内のユニークな学習プログラムを持つ大学への単位互換国内留学も可能である。または入学して半年は自分の行きたい場所でしたい学習もできる。そうだとしたら若者はもっとやる気を起こすことだろう。私は今までそのように夢を持って生きてきたし、これから先の自分に残されている人生にも夢を持って生きたいと考えている。

1. マックギル大学への道

私にとってカナダは遠くて近い国で、1971年頃から夏は看護職のメンバーと、大型バスにキャンプ道具を積んでカナディアンロッキーをキャンプをしながら移動し、その活動の中で参加者同士が体験を通して学ぶ機会を得た。このグループ名を保・助・看のためのレクリエーション研究会という。平成15年はこの研究会が35周年で、「カナダ大自然ナイアガラとメープル街道の旅」を計画していた。「カナダのケベック州に行く予定ですが、大学開学に役立つ施設を見学したいと思っ



マックギル大学

ておりますが……」と前学長の岡田了三先生に相談したところ「モントリオールに行くならマックギル大学を見学したら良いと思う。マックギルは歴史があり大きくて有名なだけでなく、教育・研究・臨床が一貫していて学ぶことがたくさんあると思います。必要なら紹介状を書いてあげます」との返事に早速添書を頂き旅行会社へ送った。平成15年は鳥インフルエンザが中国・タイ・ベトナム等で大流行したため、参加者が5名と少数であったが急遽実施を決定しメールを発信した。「決定の遅れたお詫びと理由、医療福祉に関する意見の交換をしたい。訪問予定は9月25日10時～12時又は14時～16時の時間だけしか取れない」というものであった。次の日身勝手なお願いにも関わらず「9月25日10時～12時は都合が良いのでおいでください」というDr.スーザン E.フレンチ（マックギル大学医学部副

*群馬パース大学保健科学部看護学科学科長

学部長、看護学校長)よりの返信があった。

2. マックギル大学との出会い

平成15年9月25日5人の仲間と通訳と共に、看護学校の2階事務室に9:55分に到着、部屋にはクッキーとお茶の用意がしてあり、挨拶を済ませてお茶を勧められたが、もう私達の到着を待ってすぐにレクチャーがはじめられるように室内がセッティングされて教授も待機していた。私たちはお茶どころではなく2時間の間に5人の先生のお話をうかがった。

Dr.フレンチより大学の特色「マックギル・モデル・ナーシング」について、オンコロジー・IT・リサーチ・エビデンスについてマックギル大学大学院カルメン助教授、看護のスキルアップの為に「エマージェンシー・マイクロプログラム」にかかわるマックギル大学大学院マルシア助教授、関連病院の臨床コーディネーター・病院ではマタernalヘルストレーニングのプログラム担当マックギル大学看護学部バレリー助教授・コンピューターラボラトリー、クリニカルスキルラボラトリー、シュミレーションルームコーディネーター、学部の1年生を教えているマドレーンM.バック講師が施設を案内してくれた。見学終了後部屋に戻りデスクカッションの時間に活発に質問をした。マックギル大学の歴史は古く1823年¹⁾開学なので設備が古くなっている所も在るが、それを補うだけの人材が育ちよりよい教育が、行われて人々に支持されている。モンリオールに4つの大学があるが1番希望者が多いとお聞きした。訪問時間が短く関連病院の見学は出来なかった。別れの挨拶の時に「私の大学が開学する前にマックギルの看護学校が、研修を引き受けてくださるなら平成16年前期に研修をお願いしたい」と申し上げたところ、Dr.フレンチより了解をいただく事が出来た。第1回のマックギル大学との出会いはDr.フレンチ学校長の心の広さとこんな人を受け入れようとする人間性の豊かさに感動しもう1度此処に帰って来たいという思いを強く持つこととなった。

3. 再びマックギル大学へ

お礼の手紙に前回残した課題を学習したいと思う気持ちを書いた。返事がDr.フレンチからすぐにあった。「貴方が学習したいことは、マックギル大学のサマーセッションの時ならかなえられるでしょう。その期間

内なら何時来て何日でも良い。ホテルは大学で、使用しているところを紹介するのでいらっしゃい」というものであった。早速学内にマックギル大学に研修に行きたい教員がいるかどうか希望者を募った。男性2名女性1名計3名の教員が名乗り出たので4名で行く起案書を大学に提出した。研修目標と希望する研修日時と要望事項を文章化しマックギル大学看護学校長Dr.フレンチ宛に発送した。通訳についてのお願いも別便メールに記載し発信した。準備完了のつもりで、平成16年5月31日マックギル大学看護学校2階の事務室に、午前10時に到着、校長室に通された時の第1声は、「1回もメールが届いていないので来るか来ないか心配していた。タカ子がくれた手紙に書いてある日時を信じて待っていた」とのこと、一人一人の研修計画を立て待っていてくれたのである。申し訳なさとしきさで言うべき言葉がありませんでした。同行した教員の一人がアメリカの大学院で修士・博士課程を修了していたので通訳には困らず、4人が同一行動のときは問題なかったが別々の行動のときには私は困り、Dr.フレンチは、ボランティアの通訳者を交渉をしてくださり私達の学習を助けてくれた。

この研修で私が見学した内容は私の専門である、母性看護学領域を中心に、授業・演習(マックギル大学ナーシングスクール)・病院実習中のカンファレンス・乳房ケアスペシャリストの役割と活動の場(マックギル大学関連病院)・CLSC METRO(コミュニティーセンター)その他大学内ツアーに参加する事が出来た。マックギル大学²⁾はスコットランドの富豪で毛皮商人のジェームス・マックギルの遺産が寄付され、それによって創立された。此処にマックギルという名前を付けて教育をする場をもうけ人々に役立てて欲しいと遺言し現金とロワイヤル山の南麓の土地を寄付した。その後その南麓にすんでいたお金持ちがマックギル大学に屋敷を寄付してそれを各学部の研究室・教室としてそのまま使用されているのでその外観はユニークで真にお屋敷の集合体のようでカナダの大学³⁾の中でも有数の美しいキャンパスを持つ大学として有名である。学生が大学院生や単位履修生・学部生まで入れると登録している学生数が3万人といわれる。

帰国前夜、Dr.フレンチにオールドモンリオールの海鮮レストランに招待された。

Dr.フレンチはいくつかの国の大学院の研究指導をしながら、中国で東洋医学の研究をしていることを知った。次回中国に行くのはいつごろかを伺ったとこ

る9月との返事であったので、中国からの帰りに日本に寄り本学にて講演をしていただきたいと申し上げて了解を得た。完成年次には学生の交流も出来るでしょうかと伺うと「問題ありません」との返事であった。

4. マックギル大学看護学校長 Dr.フレンチ、 助教授 Dr.アーナルト来校

お二人が、中国からの帰り日本に3泊4日おいでくださることが解ったので、学校法人群馬パース学園が正式に招待した。10月4日に本学で講演会を開催、Dr.フレンチは「マックギル・モデル・ナーシング」Dr.アーナルトは「テレビ電話による高齢者の在宅看護」がテーマであった。学生からも質問が活発にあり盛会であった。講演中の学生の表情は生き生きと真剣だった。提出されたレポートはよく講演の意図を聞き取れていたし自分の考えもそれなりの理解力で書かれていた。

5. 樋口理事長、斎藤学部長、金谷事務部長、 私の四人によるマックギル大学訪問

平成17年2月にDr.フレンチより樋口理事長と一緒に「4月15日～6月4日までの間の都合の良い日にマックギル大学看護学校においでください」という招待状が届いた。早速報告すると「4月14日～18日の3泊5日で訪問する」ということになり斎藤学部長、金谷事務部長も同行した。短い日程であったが内容の濃い2日間の計画が立てられていてその計画に従って効率よくマックギル大学と関連施設が有機的に連携して教育・研究・実践が行われている状況が、視察を通して理解出来た。またこれから将来の交流について内容



マックギル大学訪問 (H17. 4. 14～18)

左上から 高木学科長、金谷事務部長

左下から 斎藤学部長、Dr.フレンチ、樋口理事長

の濃い会談を持つ事が出来た。その内容を上げると
1) 本学と関連施設の教職員の研修を依頼する。2) 平成18年度にマックギル大学のマスターコースに1名留学生を送る。3) マックギル大学にスキルセンターが完成したら見学研修をお願いする。以上の3点を了承いただいた。

6. 学校長補佐表敬訪問

平成17年7月にDr.フレンチの補佐としてDr.ヘレン・イーザーが着任した。日本より表敬訪問がかない、10月21日14時マックギル大学看護学校でDr.イーザーに面会し挨拶と用件をお話した。Dr.イーザーより⁴⁾180AO(5年間の一貫教育)に付いて提案があった。この提案については今後の課題と受け止め、再開を約束してマックギル大学を後にした。

終わりに

Dr.フレンチはこれからもマックギル大学にノバ・スコシア州の首都ハリファックス市から通われるとの事である。訪問したノバ・スコシアはカラー〈紅葉〉の最中であり大変美しかった。Dr.フレンチは次の訪問はいつかと私に問うた。「18年の秋」と答えた。マックギル大学との出会いは、そこで役割を十分に果たしている人たちとの出会いであったと思う。Dr.フレンチとの出会いは、英語は不十分でも人の気持ちは十分伝わることを教えてくれた。そしてどんな時も受け入れていただき心から感動し感謝を申し上げ、さらにこれからもよりよい関係を保ち続けていくことに努力していきたい。



表敬訪問 (H17. 10. 21)

左から 秘書のテレモス・ダイアンさん

高木学科長、Dr.イーザー

引用参考文献

- 1) INFOEMATION FOR APPLICANTS 2004
- 2) MCGILL UNIVERSITY CALENDAR Health Sciences 2003/2004
- 3) モントリオール。アーヴィン・ワイズドルフ社。2003
- 4) MCGILL UNIVERSITY CALENDAR Health Sciences 2005/2006